

黒田裕子

APP Campへの初参加を終えて、恵まれた機会をいただけたことに感謝の気持ちでいっぱいです。まずはプログラムの準備運営にあたってくださった国内外の皆さまにこの場をお借りして御礼を申し上げます。

「アート」に携わる一個人として、そして地方の現代美術館勤務という視点から、今回のCampへの参加に際して広狭、濃淡を帯びた複数の課題や期待を持って臨みました。アジアにはどのようなプロデューサーやアーティストがいるのか。アートシーンはどのようなものか。日本で創造され、発信するアートの社会的・国際的役割は。アジアの一員として見落としていることがあるのではないか。新たなチャンネルへの期待。好奇心。

滞在中に用意されていたアートスペース訪問、レクチャー、ミーティング、グループリサーチ等々を通してこれまで知り得なかったオーストラリア（メルボルン）固有の歴史文化の潮流を学ぶことは、翻って日本の潮流を考える上で示唆に富む内容に満ちていました。

またCampメンバーと縦横無尽に絶え間なく交わされる会話を通して、彼らの視点から各地域のアートシーンの一端が朧げながら見えてきたことも大きな収穫でした。数年分のフェスティバル通いで得られる以上のネットワークキングと信頼関係を一週間でつくることができた思いです。志を同じくする仲間と腹を割って話しができる環境はCampの重要な要素だと言えます。

4回目の開催ということもありますが、グループ行動が多いにも関わらず強制ではない自然なまとまりに、アジア的空気感と時間の流れを感じずにはられませんでした。そこにはさりげない気配りやフレンドシップ、連帯感が溢れ、この出逢いから今後何かしらの具体的なプロジェクトに発展していく場合、ここで共有した「気配」は私たちの目に見えない大切な共通言語（基盤）となるでしょう。

課題や問いは常に有り余る程ですが、Campを起点として新しい領域に踏み込んだという確信を持つことができます。このようなポジティブなエネルギーを充填できる時間と空間をプロデューサーたちが今後も折に触れて確保できるよう、この縁を育てて行きたいと思えます。